



図 50 (C7)



図 51 (C8)



図 54 (C11)



図 55 (C12)



図 52 (C9)



図 53 (C10)



図 56 (C13)



図 57 (C14)





図 66 (C23)

図 67 「震災写真」該当地点（酒田町域）  
（表6、図 44 (C1)～図 66 (C23)に対応）  
----- 点線は該当推定地域



台紙の形状が2種類認められることから、撮影者は酒田町内に縁の深い人物で、かつ酒田町で営業活動をする写真師（飾り台紙使用）、あるいは写真愛好家（無記名の台紙）によるものと考えてよいかもしれない。

いずれにしても、黒森、飛鳥村神社、高野濱などの酒田近隣の3点を含むものの、地震で倒壊した寺院、米倉庫、あるいは当時の酒田が誇る和洋折衷様式の酒田尋常高等小学校、出火後の焼け野原と化したかつての中心街など、酒田の居住者にとって馴染みの深い建造物や繁華街であった。さらに、避難小屋にいる被災者を写した2点加わる。明らかに地震調査の科学者とは異なる眼差しが捉えた情景である。

#### 4.2 哀話を語る石版画

彩色石版画も発行された（表7 図 68 (D1)～図 73 (D6) D類とする）。発行元は酒田町大字今町池野伝左衛門、印刷所は大字濱町の業者阿部喜平治である。地震からはほぼ3ヶ月を経過した1895年1月

表7 D	酒田大震災写真図	台紙(内寸)cm	備考
no	タイトル		
図 68 (D1)	酒田尋常高等小学校大震災潰倒之図	22.4*32 (19.3*28.9)	図 64 (推定原図)
図 69 (D2)	酒田大震災浄福寺崩壊之図	22.4*32 (19.3*28.9)	図 65 (推定原図)
図 70 (D3)	酒田大震災出町潰家之図	22.4*32 (19.3*28.9)	図 62 (推定原図)
図 71 (D4)	酒田本町大激震烈火中人民狼狽之図	22.4*32 (19.3*28.9)	図 65 (推定原図) 図 61 (推定原図)、図 63 (推定原図)
図 72 (D5)	酒田大震災船場町湯家崩潰烈火焼死之図	22.4*32 (19.3*28.9)	聞くも悲きハ船場町繩屋にて久吉と云へる芸妓ハ常に孝心深く貞実にして且美なり、多く人に愛されけるが、去ル二十日同町湯屋に入浴上りて、戸口に出んとするや、俄然一震に家屋崩壊、哀れや、梁柱に足を圧され声を限りて叫喚、救を呼も助くるハ愚か、悉く悲痛の声のミ、折節同町善治と云へる人、一小児を助け抱き馳せ掛けるを、飛付斗り泣すがり、見るに久吉おるゆへ、何とか助け得させんと、必死に梁木をゆり起さんとせしも、力たらず、応援を求めんとするに、忽ち猛火起り、黒煙の中に包れ無惨と思ふも為術なし、これを助けんとすれハ漸く助け得たる小児我共焼死するに至る、無き命と諦めたしを云う捨て烈火の中を辛じて逃れ出でしが、久吉の全身忽ち火となり、苦惱狂乱して死せしハ、実に悲惨と云ふ
図 73 (D6)	酒田船場町旅人宿大震災大火遭遇之図	22.4*32 (19.3*28.9)	今回大震災大火の災害に罹り死傷せし人数多き中に、惨酷なるハ船場待町にて伝三郎と云へる旅人宿ありて、実直の間に高く増々盛大なりしが、去る二十日俄然激震の襲来忽ち家屋崩壊、逃るに暇なく、無惨や、梁柱に圧されハ胸を砕き、腕を飛ばし、満身鮮血に染ミ、苦痛を叫も、猛火ハ一面に移り来りて、家族五人、旅客四人悲命の死を遂げたり、聞さへ無惨の末としかり
	(矢印奥付)	22.4*32 (19.3*28.9)	発行元 池登伝左衛門 山形県酒田大字今町番地；印刷所 阿部喜平治 同県酒田大字濱町八番地；定価金貳拾五銭；印刷明治二十八年一月二十二日、発行同年同月三十一日

酒田市立光丘文庫蔵



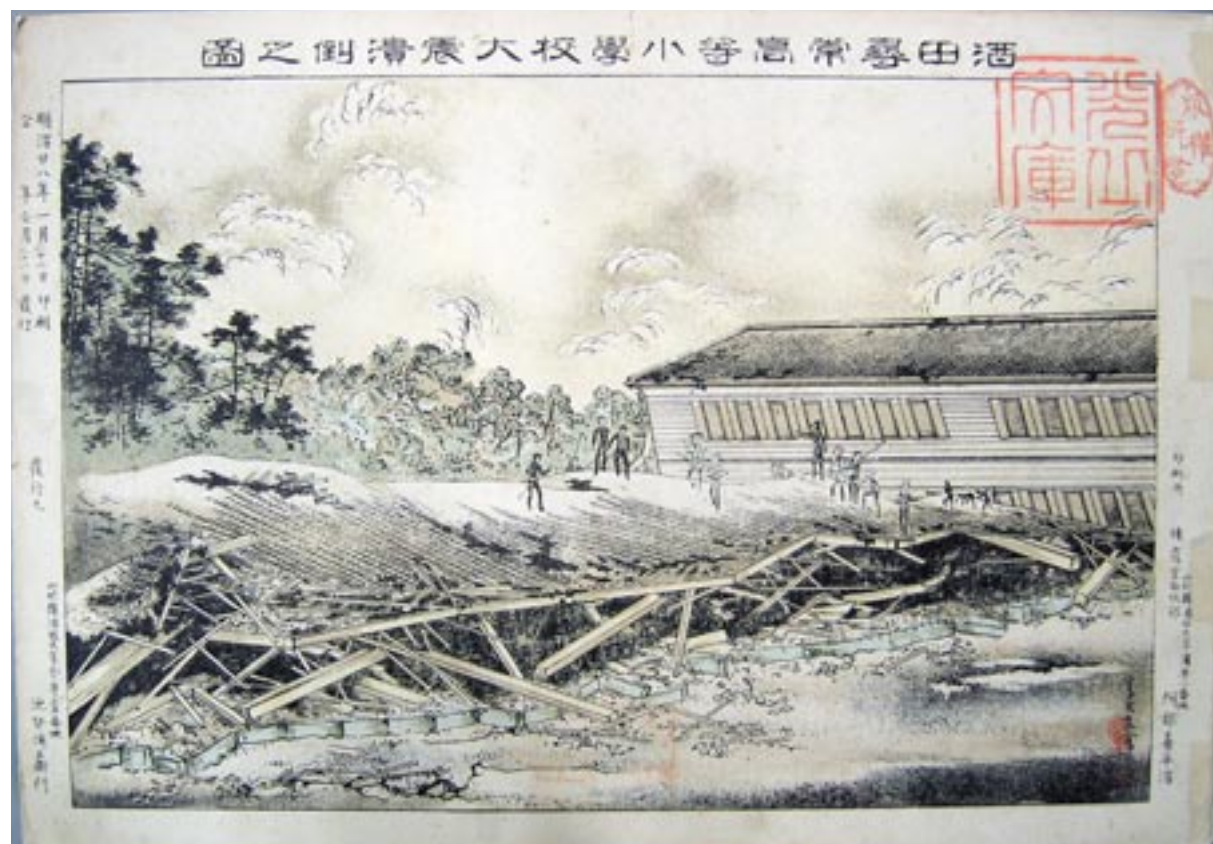


図68(D1)



図70(D3)



図69(D2)



図71(D4)





図72(D5)

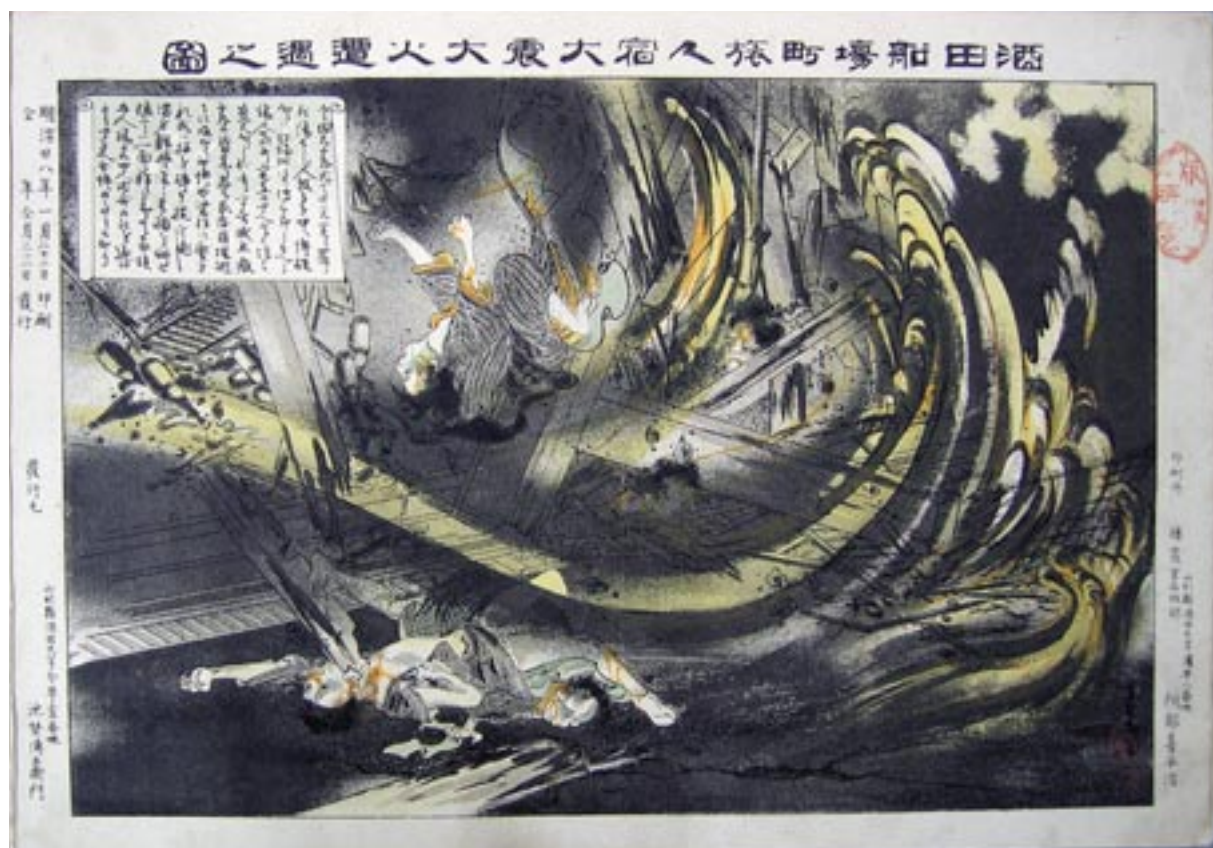


図73(D6)

末の発行であるが、両町ともに、図1の「震災一覧」によれば、焼失区域に入る。なお、この「震災一覧」も阿部喜平治が印刷している。阿部は石版印刷所を棲霞堂（霞を喰って生きる）と名乗り、敢えて震災後の現状を自嘲的に表現したのではないと思われる。ここには、石版印刷に携わる人々の気風の片鱗を窺わせるものがある。ともかくも、3ヶ月後には、こうした出版を手がけるところまで立ち直ったと考えてよいかもしれない。

ここに描かれる光景は、表Dの備考欄に推定原図を摘記したように、6点のうち、4点がCの写真に基づいて石版画に描かれたものであり、酒田尋常小学校、倒壊、焼失する浄福寺、もっとも繁華な町並みを誇った出町など、繁栄の酒田が喪失したものの大きさを象徴的な建物や場所で描いている。しかし、写真の原画をなぞるだけではなく、そこに震災哀話を付け加えた石版画が製作された。これらがどういう人々に向けられたものであるのかをみるために、語られる哀話を以下に紹介しておこう。

図71 D-5「酒田大震船場町湯家崩潰烈火焼死之図」は、表題の通り、船場町で評判の芸妓が倒れた風呂屋から出ようとした矢先、梁に挟まれ、救いを求めている。同じ船場町の者がこの芸妓が梁の下での焼死になるのが目に見えていながら、ほかに子供を助け出さねばならず、迫り来る火炎に身を焼かれるのを、みすみす見殺しにせざるを得なかったという、語るも悲しい物語である。写真C-2の「船場丁焼跡之図」の構図を元にしながら、そこにドラマチックな物語を配した。

図72 D-6「酒田船場町旅人宿大震大火遭遇之図」は、同じく船場町の、旅人宿の一家5人と、旅客4人が非命の死を遂げたという、聞くも無惨な話を配した。

上記2図ともに、災害現場に居合わせなかった作者が想像で語る物語のクライマックスの場面再現である。写真で捉えた倒壊、焼失する建物だけでは再現できない震災の惨状は、人間ドラマを配することで、臨場感と、ある種の本当らしさが生まれてくる。恐らくは、災害現場を正確に伝える写真だけでは、買い手に満足を与えないことを承知で、こうした作品が作り出され、買い手も災害とはこうしたことが起きるものだろうと納得するのである。ここでは、事実かどうかは問題ではないのだ。つまり、「事実」を写す写真に基づくことでリアルさには疑いがもたれることはなく、そこで起きた哀話に、より一層の本当らしさが付与される。写真はここでは場面を提供する道具にすぎない。

写真を求める人と、こうした絵図を買い求める人とは社会階層が異なっていたとはいえなくても、少なくとも、写真を手にする時とこうした絵図を眺める時とでは、人は違った心持をもっただろうといえる。科学者が写真に求めるものとは異なる、擬似写真の活用の方といえるだろう。

#### 4.3 絵巻が語る震災の光景

庄内地震を描く生駒大飛作の「震災実況図」（昭和38年指定酒田市指定有形文化財、縦25.5cm＊横915cm、酒田市立光丘文庫蔵）を考えておきたい。この絵巻は災害メディアとして巷間に流布する性質のものではない。量産されたものではないから、写真あるいは石版画で伝えられる災害イメージの対極にあるものである。（図73 震災実況図 口絵・本文図版参照）

すでに、本絵巻については、別の場所で紹介したことがある<sup>(37)</sup>。その概要をここで再び述べておく。

この絵巻は、震災時、酒田市に滞在していた画家が翌1895年3月、眼に残る惨状を描いたと末尾





図74 「震災実況図」(酒田市立光丘文庫蔵)

に記されている。

作者の大飛と称する画家については、以下のことが知られている。

生駒大飛（1857－1922）、本荘藩士。父武雄は知行高200石の重臣で、家老職を歴任した。大飛は画工として技量を磨き、詩文を京都において、南画を大阪において学んだ人物<sup>(38)</sup>であるという。

絵巻の構成は、卷子状の一図のはじめに墨書で「明治二十七年十月二十二日酒田大地震惨状」と記され、朱書の説明が付いた11の被災実況図からなる。家屋・樹木などは墨の濃淡、焰は朱の濃淡、炎のなかを逃げ惑う人々や震災後の仮小屋周辺の人々の動きを示す箇所のみならず若干の水色を入れるなどの色遣いがなされている。絵巻のなかの説明を「」で示し、なにが描かれているのか、摘記する。

＊「伝馬町実景 二十二日夜写所見」

ここでは酒田町の繁華な街の家屋が焰に包まれ、人々が逃げまどう姿が描かれている。

＊「観音小路実景 同夜所見」

港町の繁栄を物語る当時の馬亭、鰻亭、和田八などの料亭の大櫓が炎の中に崩れ落ちていく様が描かれている。

＊「観音小路鰻亭惨状 二十三日午前写之」

鰻亭の焼け落ちた後に門前に焼けこげた死体が描かれている。

＊「以下於船場町 写生」

子供、あるいは妊婦が苦しみながら死んでいったであろう姿を描く焼死体の図、埋葬の用意が整った早桶、菰、筵に置かれた死者など。

＊「今町弁天社内仮小屋」

引戸で周りを囲った仮小屋の廻りで煮炊きをしたり、米を運び込んだり、大八車を引くなど、震災後生活を取り戻すためにいち早く立ち働く人々の姿が映される。

＊「海光（向）寺」

＊「山王神社」

＊「晏（安）祥寺 四日後大潰」

＊「祥（浄）福寺」

＊名称不記（倒壊家屋の図）

「明治甲午十一月（ママ）二十二日酒田大震家屋大潰危急九死得一生、其惨状有眼、因以製其図、以送堀雅兄、于時乙未春三月 大飛（印）」

本図をはじめてみた時には衝撃を受けた。同じ惨状を描いた、炎に包まれる家屋など、前項の彩色石版画が描く世界とは異なる感触をもっているからである。

江戸時代に描かれた震災絵巻、たとえば島津家文書の「江戸大地震之図」などから受ける印象とも異なる<sup>(39)</sup>。「江戸大地震之図」は、現在ほかに1巻の写本が確認されている災害絵巻の名品としてよいだろう。東京大学史料編纂所蔵の一卷は、島津家から京都の近衛家に入嫁した斉彬の養女へ江戸地震の惨状を知らせるために、御用絵師に作らせたものと推定される。災害時の江戸市中の混乱状況に、絵巻の約束事としての起承転結のメリハリを付けたストーリー性のある展開で、地震で起きた未曾有の事態を説得力にあふれた筆致で描いている。絵巻の約束事を逸脱することなく、災害絵巻としての

見事な完結性をもつものの、あくまでも眺めるものとしての存在である。

これに対して、大飛が描く黒焦げの焼死体、それも苦しみだけが亡骸に固結したような虚空を掴む手や指、姿態をねじ曲げたままの子供の姿など、墨絵の単純な線描で象られたイメージは、絵画でありながら、「絵空事」を逸脱した迫真性を以って見る者に迫る。実際にはこれまでの震災で少なからずあった光景であろうが、江戸時代の災害絵図ではこうしたリアルな描写はされていない。

これらはなにによってもたらされたものだろう。まず、作者自身が述べるように、10月（11月は誤り）22日の震災で九死に一生を得たという自らの体験に基づいていること、それを表す技量の高さがこの絵に一層の迫力を与えていることには疑いない。それが前提条件であるにしても、描こうとしているもの、あるいは描くという行為自体が、江戸時代以来の絵師であった大飛自身のなかで、すでに変化していることを見逃すわけにはいかない。

明らかに近代に入って災害を見る眼差し、災害を描く行為そのものが変わったのである。ここでの文脈からいえば、それは、写真が身体レベルにもたらした大きな社会的変化といってもよい。つまり、ファインダーという存在が、ものが見えるということと、ものを見るという行為の違いを人々に自覚化させた。そのことを通して起きた、外的世界のイメージの多様さへの認識構造の転換ではないだろうか。もはや、画家は約束事を踏まえた、一定の流儀に従って描くという姿勢を放棄できる、あるいはしてもよいのだと考えるようになったのではないか。つまり、絵師の眼差しから解放され、作者自らが対象に対峙して直接迫ることが可能になったのである。大げさに言えば、この大飛という画家における近代精神の獲得といってもよいだろう。一人の絵師の内面を画業からフォローすることはすで行なわれているが、ここで大飛について、それを検証することはできない。

災害写真が活躍し始めるのは、1885年の大阪淀川の洪水あたりからであろうが、磐梯山噴火、濃尾地震は日本全体が驚愕した大災害で、この間に災害の情報量は飛躍的増加した。磐梯山噴火では、爆風で倒れた家屋だけでなく、人馬、泥流に流された死体などの写真も残され、これらが幻燈写真として広く活用されている。大飛が当時流布した災害写真を直接目にしたかどうかかわからないが、旧時代とは異なる災害情報が流されるなかにいたことは確かであろう。そして、日清戦争画もやがて市場を席卷する社会環境のうちにあったことは事実である。そうした環境にあって、写真のリアリズムでもなく、写真石版のおどろおどろしさでもなく、錦絵の想像画でもなく、まさに大飛の眼に焼き付いて離れなかった生々しい状景に衝き動かされ、描かれた作品ということがいえる。

#### 4.4 活字メディア—震災冊子・新聞・官報

災害像は写真や描かれたものだけを通して与えられるわけではない。活字は直接災害イメージを与えるものではないが、想像力をかきたてる力を持っている。文字が喚起するイメージについて、ここで論ずる余裕はないが、活字メディアのなかにも多くの画像が取り込まれ、文字情報と相俟って、さらに災害イメージが増幅されたことは想像に難くない。

庄内地震に関する震災冊子2冊の内容を簡単に紹介しておく。

1. 鶴迺舎主人述『東西田川・飽海三郡 甲午大地震』 著者鶴迺舎主人 印刷発行所山形県西田川郡鶴岡町馬場町甲3番地野沢活版所 明治27年12月10日発行（23.6cm×16.4cm 40頁、折込図版2枚・彩色木版震災地図並びに石版画による震災絵）

2. 編述者佐藤多治郎『莊内 明治震災録』発行者山形県東田川郡藤島村大字藤島字村前35番地佐藤多治郎 印刷者山形県東田川郡鶴岡町下肴町45番地山田保吉 明治28年2月15日出版 (19.7×13.3 48頁)

以上の2冊の震災冊子は、いずれも活版印刷で、1の『甲午大地震記』は折込図版2枚が綴じ込みで付いている。

こうした震災冊子のもっとも早い例は寛文2年(1662)近江・若狭地方を襲い、京都市中にも被害を与えた寛文地震のルポルタージュ、浅井了意の仮名草子『かなめ石』に求めることもできるだろう。しかし、江戸時代後半には、たとえば、文政13年(1830)の京都地震について、小島涛山『地震考』のような地震解説と被害の情景を解説した出版物が地震の度ごとに出版されるようになった。幕末の安政東海・安政南海地震津波(1854年11月)の折には、作者不明、検印のない、いわばかわら版的冊子類が被災地の大阪で多量に発行され、また、翌年の江戸地震(1855年10月)ではさらに多くの冊子類が発行されている。したがって、近代に入ってはじめて発行されたという類のものではなく、災害時にこうした冊子が出ることは近世以来の伝統を引き継ぐものとしてよい。

しかし、内容は1の『甲午大地震記』と2の『明治震災録』では、記述のスタイルが異なる。前者は、「述」とあるように、目次は「見出し」とし、口述スタイルを通して、最後は「おしまい」とする。たとえば、地震の原因については、

地震の原因

を申し述べましょう、学者の申しますには地震の原因は中々六ヶ敷が先づ三種に成る一つは火山が噴火したり又は爆裂したりするときに起る火山地震、一つは地中に在る石灰や石膏などか水の為めに融けて大きな穴が開きとうとう地面を押へることが出来なくなってどんと一部が落ちる時に起る陥落地震、一つは種々様々に入り交って居ります地下の磐石が其続き目に於てずっと<sup>(40)</sup> 沁ることある時に起る地沁地震と斯う云ひます、…

こうした記述が全編を通じてなされている。地震の原因についての解説は、当時、震災予防調査会の学者たちが調査し、報告した内容が反映されている点からして、スタイルは江戸時代以来の伝統的なものであっても、内容は地震に対する当時巷間に流布した学者たちの見解を積極的に取り入れ、紹介しようとしたものとみることができる。

しかし、そうした内容ばかりではなく、「惨況中の惨況」として、「可哀そうなのは袖裏役場の書記高橋某の妻女です」として娘の目の前で焼死した母親の話や、「無残なのは白崎太物店の主人」が逃げ場を失い、米穀倉庫の瓶のなかに娘と逃れて、蒸し焼きになったという当時著名な話などが語られている。

この冊子には、彩色木版震災図のほか、石版画図版も折込まれている。活字とともに写真を印刷する技術がまだ一般には流布していなかったため、写真石版折込まれたのである。ここでは、いずれも酒田町の惨状を映した写真と同じ「酒田出町」、「柳小路」の2枚と、「黒森役場即袖浦村役場」の3点の石版画である。「酒田出町倒壊の写真図より模写したるものにして…」といった説明が加えられている(図74~75)。写真が逼真性において絶対的な優位を持つと信じられていたなかでは、写真整版技術が不安定な段階で、こうした石版画が、「真図」と銘打って売り出されていた。この点は、この時期メディア全般を考える場合の前提条件である。この石版画3点も、まさしく災害現場の情景なの

だというメッセージが言外に籠められている。発売所はいずれも鶴岡市の弘文社、野沢活版所、慶全堂の3箇所である。

これに反して、後者2の『明治震災録』は「販売を目的とするに非ずして只知己有志者間に頒布し以て将来の参考に資するにあり」とする。つまり、広範な読者を想定していないのである。したがって、内容も、「実地見聞する処」と「其筋の調査を主として以て正確を期せり」とあるように、地震とは何ぞや、古来出羽の大地震、庄内大震前の情況、大地震当時の情況、大地震後の有様、将来家屋の構造法、三郡の被害統計の各章からなり、ほとんどが官報、震災予防調査会の報告書、新聞記事から引用したものと推定される比較的硬派の記述が中心である。著者自身が序にのべているように、正確を期すことを目的とした震災誌であろう。

上記の二書のスタイルは硬軟対照的ではあるが、それぞれ新規メディアによる描写力の採用あるいは新聞、官報などからもたらされる科学情報を取り入れるなど、時代の変化に対応した工夫が凝らされたものになっている。

\* 新聞

当時の新聞を悉皆点検する余裕はなかったが、多くの新聞が庄内地震について報道していた。震災

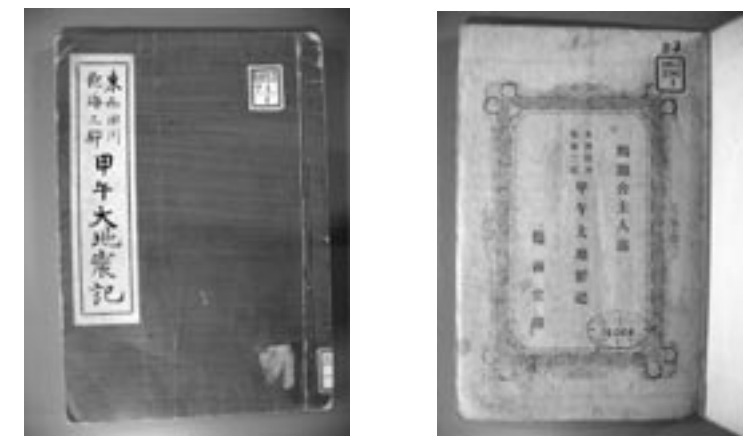


図75 「甲午大地震記」(酒田市光丘文庫蔵)

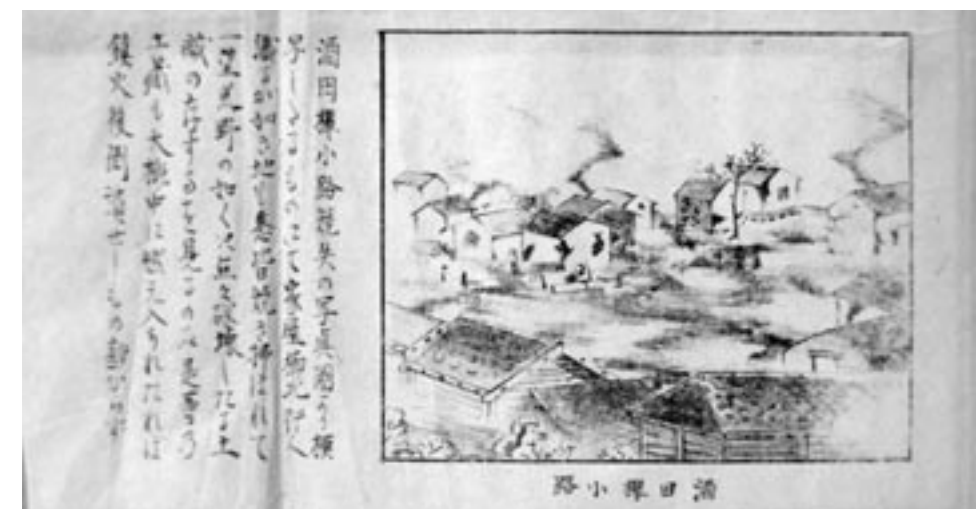


図76 同上折込写真石版図



予防調査会では、濃尾地震以後、全国の新聞記事のうち、自然現象のイベントを切り抜いてファイルしていた。<sup>(42)</sup> 庄内地震についての切り抜き帳から、対象となった新聞は、『函館新聞』、『岩手広報』、『東奥日報』、『奥羽日日新聞』、『山形日報』、『秋田魁新聞』、『新潟新聞』、『越佐新聞』、『上毛新聞』、『信濃日報』、『山梨日日新聞』、『国会』、『時事新報』、『開花新聞』、『都新聞』、『東京朝日新聞』、『郵便報知新聞』、『国民新聞』、『毎日新聞』、『自由新聞』、『萬朝報』、『二六新報』、『東京日日新聞』、『日本』、『やまと新聞』、『めざまし新聞』、『読売新聞』、『新朝野新聞』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『中国民報』、『香川新報』（以上34紙）で、ほぼ全国に亘っていたことは確認できる。このうち、現地に記者を派遣したのは、『東京朝日新聞』と『萬朝報』である。『東京朝日新聞』の場合をみておこう。

『東京朝日新聞』に地震発生の第一報が掲載されるのは、地震発生2日後の10月24日からである。一面トップ電報欄に「山形県下の激震」という見出しであったが、山形発23日午前11時35分であり、「西田川、東田川、飽海の三郡殊に甚しく家屋倒壊せるもの無数、人畜死傷数百名あり各所に火災起り未だ鎮定に至らず…」と概報が伝えられた。同紙一面の5段目には、各地発の電報による概報が掲載された。新庄発22日午後6時10分がもっとも早い。震災激甚地の酒田からは23日午前11時発で、「一部分を残し全市焼尽す…」と報じられている。

26日の『東京朝日新聞』は、濃尾地震で震災地取材経験のある野崎城雄記者を現地派遣したことを紙面トップで報道した。同日の一面3段目には「鳥海山噴火」の伝聞情報を伝え、この地震が鳥海山噴火と関連するとする巷間の噂があることを示唆した。

30日一面に、野崎特派員が28日酒田町に入り、「酒田震災の惨状」第1報として、焼失家屋1208戸、倒壊家屋841戸、死亡者138名、炊き出し受給者6300人に及ぶことを電報で伝えた。11月2日第2報が「両羽の烈震」として報道され、3日第3報、8日第4報、9日第5報、13日第6報を以って、特派員報告は終了する。

報告内容は、現地入りして見聞した震害の激しさを伝えると同時に、取材活動の実態も報告している。酒田町の翠松亭で、偶然旅宿を共にした帝国大学から派遣された理科大学教授田中館愛橘の許に震災予防調査会から派遣された大森房吉が来訪、2人の学術上の談話を傍聴している。亀裂の方向、泥土の噴出状況などから地震の性質がわかるというのが、議論の内容は記者にはわからないから、今後の調査結果を俟つというものであった。その後、田中館の現地調査に同行した（第3報）。黒森激震地に赴いた後、県官吏に会い、そこで得られた被害地の分布を地図上に示した（第4報）。〈図77『東京朝日新聞』11月8日4報の地図〉

10月31日には、酒田市街の激震地巡視中、震災予防調査会あるいは帝国大学から派遣された小藤文次郎、辰野金吾、曾根達蔵の3人に遭遇、小藤文次郎にこの地震の性質などについて聞き取りをした。小藤の見解は、この地震は、地汙り地震と考えられるが、当時鳥海山噴火の影響かという懸念が大きく、田中館の調査待ちであることなどであった（第5報）。翌日11月1日には、山形に行き、鳥海山を調査した田中館の帰りを待ち、鳥海山登山の実況を聞いている。11月2日は県庁に行き、県官に地震は火山作用ではないとの推定を伝え、米沢→栗戸→福島経由で、帰路に着いた。最後に、「学理上の観察は専門家に任せ、余は唯震災の実況を有りの儘報道せんとする」と、特派員としての立場を表明して特派記事を終了した（第6報）。



図77 『東京朝日新聞』  
明治27年11月8日二面掲載被害分布図

災害現地への特派員派遣はすでに先行の大災害では行なわれているが、当時、特派員記者は、現地の被災状況を伝えるものの、終始、政府筋から派遣された中央官吏、あるいはこの場合では震災予防調査会派遣の学者などに随行し、情報を得るスタイルが一般的であったようである。庄内地震の場合も同様である。この取材源が当時は最新の科学情報をもたらすものであった。

#### \*官報

庄内地震について官報の第1報は、「観象」「観象」における地震概況「一昨日二十二日地震ニ付キ山形、秋田ノ二測候所及秋田県由利郡役所、山形県東田川郡ヨリ左ノ報告アリ（中央气象台）」である。<sup>(43)</sup>

翌日25日には「雑事」に山形県発の電報で、震災続報として、被害戸数、死亡者数などが掲載された。<sup>(44)</sup> 10月29日の「観象」には、地震験測として、「発震時10月22日午後5時39分、震動時間36分20秒、震動方向南東 北西、最大水平動120mm（曲尺4寸余）、最大上下動10mm、性質急激」とする地震調査報告が掲載された。<sup>(45)</sup> 学者派遣記事について先述したので省略した。

そうじて、被害の大きい地震にしては、新聞、官報ともに記事量が少ない。新聞の場合は、『東京朝日新聞』に限らないが、この間の一面トップの記事は連日、開戦中の日清戦争関係記事で覆われている。社会の関心は戦争一辺倒であったから、災害記事の扱いは極めて小さい。また、官報も、日清戦争関連の外交交渉、戦費増強、戦死者名などに割かれ、「観象」項目にこの地震についての観測記事、地震被害などが報告される程度である。

こうした状況のなかで一地方の災害に対する社会的反応のあり方を示すものとして、『読売新聞』<sup>(46)</sup> が伝えるところは、興味深い。記事をそのまま引用しておく。

◎山形県知事 皇后陛下の御深意を謝す

山形震災につき負傷者の為め救護員派出の御下問に対し木下山形県知事ハ皇后大夫香川敬三氏に宛て一昨々日左の如く電報したり

救護員御派出の件御厚志深謝す重症者少く大抵手当出来る、時節柄といひ御辞退仕り候

つまり、皇后が総裁である日本赤十字社を通じての救護員派遣について、「時節柄」すなわち、日清戦争開戦時の状況に鑑み、県はこれを辞退したのである。県知事がいかに全般的に手当てが足りていたわけでないことは、東北民友会による震災救恤の檄文を見れば明らかである。

東北民友会の義捐金募集は、いまだ記憶に新たな濃尾地震時に民間で率先して救助活動が行なわれたことを引き合いに出して、「今日正に兵を清国に構へ全国皆其耳目を軍国の事に傾注して復た他を顧るに遑あらずと雖外事を以て国内の惨禍を度外に措くハ吾人決て我國民の意に非らざるを知る<sup>(47)</sup>」と激を飛ばした。戦時であって、国内の惨事に同情している余裕を持たないかもしれないが、それは我國民の本意ではないだろうと訴えたのである。

さらに、在東京の庄内同郷会は、震災救助金募集のため、本郷中央会堂において落語の円朝、薩摩琵琶、西洋奇術の天斎正一などの演目で、11月24日慈善大演芸会を開催した<sup>(48)</sup>。ここに出演した三遊亭円朝は、「日清事件の為に世人が一般に冷淡視するハ嘆息の至りなり」として、本郷春木座で、慈善演芸会を催し、春木座主の賛同を得、興行上の一切の費用も義捐すると報じられている<sup>(49)</sup>。

地元紙の『庄内新報』は、10月31日逸早く義捐金募集を開始した。しかし、この動きは、全国紙の動きに繋がっていない。同紙の義捐金総高を示す紙面を見出せなかったが、義捐の範囲は地元周辺に限られたと推定される（前掲図3『庄内新報』31日義捐金募集記事 参照）。

## V まとめに換えて—写真以前と写真以後 災害イメージはいかに変化したか

### 5.1 論点の整理

本論の冒頭に、近世末期の頻発した災害について、公私さまざまなレベルの災害記録が残されているのに比べ、近代以降、災害に関する民間での記録が減少するのはなぜかを問うことが本論の目的だと述べた。このことを考えるために、近代以降の災害に際して登場する写真が他のメディアにどのような影響を与えたのかを、庄内地震を具体的事例と考察を進めてきた。これまで、本論での分析を通じて、ここで示すことの出来る論点は以下のようである。

①写真が科学者の眼差しの代替物としてこの地震では大きな役割を担った。②これに限らず、写真術の社会的受容は、一握りの科学者だけでなく、すでに一般社会で写真師の営業活動が成り立つ時代となっていた。③したがって、民間においては、科学者の眼差しとは異なる、被災者の惨状を映し出す災害写真も流布した。④これらの写真はいまだ鶏卵紙写真が一般的であって、印画紙に焼き付けて大量に出回るまでには至っていない段階であったから、写真の「無言」の世界に、言葉と色を添えた写真絵あるいは石版が写真の代替物として流布した。これは写真に極似する視覚性を備えていても、写真ではなく、錦絵が持つ色と詞書を併せ持つ代物であったために、過渡的で、同時に一種アンビヴァレントな要素が、新旧両様の人々に素直に受け入れられた。

さて、上記の四点を以って、写真が果たして災害記録減少の要因なのかどうかを結論付けるには、説得性に欠ける。本論での当初の課題に対して、上記の庄内地震の災害メディアに関するケーススタディから直接回答を引き出すにはいまだ不十分なのである。

しかしながら、まだここで論じていない領域が残されている。それは、写真絵あるいは写真石版が登場してくる背景として背負っている錦絵の伝統である。そこで、この点から、本論の目的に沿う問題を見通すことにしたい。

### 5.2 写真絵と錦絵

一体、写真絵と錦絵はどこが異なるのか。なぜ、近代の災害メディアでは、錦絵は衰退し、写真が流布するのか。一旦、写真のリアリズムに接した眼には、本当らしさを求める価値観が支配的観念となることは予測できるが、しかし、それが錦絵を捨て去る理由であるなら、その理由を考えなくてはならない。実はこの課題は、すでにこのプロジェクトで検討済みである。錦絵の世界で、災害はどのように描かれるのかを、「名所江戸百景」を素材に分析した<sup>(50)</sup>。そこで得られた結論は、以下のようなものであった。

「名所江戸百景」は、安政江戸地震後4～5ヶ月を経て出版された。この間、地震の衝撃を受けた江戸市中は、地震からの復興を遂げたとはいえない段階であるにもかかわらず、歌川広重はなにひとつ災害の惨状を直接画題としてはいない。広重の住む京橋狩野新道付近は倒壊家屋から発した火で辺り一帯が焼失した。広重の家は幸いに火災から免れたが、恐らく倒壊あるいは破損したと推定されている。こうした点を考えると、いくら板元の注文とはいえ、広重が従来通りの江戸名所を果たして描けるのかという疑問がわたしたちの出発点であった。この疑問を解く鍵は、従来から指摘されている「名所江戸百景」の縦型の紙型に、近景を額縁的に描き、中景を省き、遠景を描くというこのシリーズ特有の構図にあった。共同研究者原信田実の絵解きの結論は、近景にはいわば、当該名所を示す記号としてのシンボルを配し、中景を略し、遠景に凜とした形か、あるいは微かに判別できる形か、ともかく復興の江戸の姿を描くというものである。考えてみれば、現状を描かねばならない中景を省略することは、広重自身の内面において、いまだ混乱のうちにある江戸の現状に絵画的省略を施すという配慮でもあったのだ。したがって、この「名所江戸百景」特有の構図は、安政江戸地震直後の江戸を描くために、広重のなかでは必然の構図として動かないものであったに違いない。こうした絵画上の作為は当時の仲間内の「通」たちには一目でわかるものであったのだろう。

この広重描く江戸名所は、世に知られた場所であるとはいえ、それを記号として示すことは、開かれた世界に通じるものではなく、江戸に親しむ人々の中での閉じられた世界の通念を前提にしている。

錦絵のこうした「狭さ」を示す事例をもう一つ挙げておこう。安政江戸地震の時に大量に出回った鯰絵の場合である。鯰絵のうちでもこれらは、地震鯰絵と呼ばれ、安政江戸地震の直後に錦絵の通常の届けを経ずに摺られ販売された無届出版を指している。この錦絵が鯰絵と呼ばれる理由は、地震を起こした元凶を川底に生息する鯰だとして、地震鯰を責める民衆や、余震を収めてもらうために鹿島明神を拝む人々など、鯰が主役として登場するからである。やがて、震災景気をもたらしたとして、鯰が祈り上げられる構図も登場する。これらは江戸地震の復興を願って描かれた願掛け絵のような要素を持ち、災害の惨状そのものが直接描かれてはいるものではない。しかも、現在200点以上残されている鯰絵を分析した結果によれば、次々と江戸の年中行事を取り入れ、新しい構図で鯰絵の量産が行なわれた<sup>(51)</sup>。したがって、江戸に住む、あるいは江戸に親しむ人々の間にのみ通用する記号が刻み込まれた判じ絵の一種で、刻み込まれた記号がいかなる場でも直ぐにそれとわかるというものではなか



ったはずである。また、そこにこそ、絵解きの楽しみを共有する世界も存在していた。

したがって、写真との相違点は明らかである。対比的に捉えれば、写真のリアリズムは普遍性を代表し、錦絵の記号的世界は閉じられたコミュニティーを示唆するのである。

さて、写真論の多くは、絵画との関係性において、その芸術性の評価を問い、あるいは写真芸術固有の領域が成立するにいたるかを論ずるものが多い。写真がわが国に導入される過程を論ずる場合には、写真の「迫真性」が絵師の心を捉え、写真師に転ずる者たちが絵画の分野から輩出したことが指摘されている<sup>(52)</sup>。だが、災害写真は、いわば芸術写真とは異なる役割を担う。本論の対象とする時期においては、その期至らず、災害写真がその報道性を武器として新しい分野を拓くには至っていない。技術的不安定さが残り、写真がその速報的な力を発揮するまでには至っていなかったからである。したがって、この段階では、むしろ、人間の眼差しでは捉えることのできない全体像や細部を、目的に適う正確さで再現する映像力が第一義的に求められた。これは、限られた目的を持つ学者などにのみ有効な存在であった。しかしながら、こうした写真は、写された対象も、その効用も一般の人々が望む対象と同じではないから、災害の衝撃を受け留める人々の姿を対象とする写真が民間に流布する。また、同じく写真師が多く手掛けたのは、今日のカラー写真のように見えはするが、手描きで色付けされた乾板スライドである。これは、幻燈写真としても大衆に人気を博した。さらに、写真のリアリズムに託して、錦絵の要素を文字通り上塗りした「写真絵」という写真と錦絵の両様の価値を併せ持つ過渡的メディアが登場し、多くの人々が抵抗なく、受容する災害メディアとして巷間に流布した。安価、簡便な印刷技術で、鶏卵紙写真とは違い、大量印刷が可能なメディアであったことによる。その具体的な形は、すでに前章でみてきた通りである。

### 5.3 まとめに換えて—マスメディアの圧倒的力

さて、大量印刷を経営的に可能にする条件は、販売網の成立である。すでに、みてきたように、新聞、官報などによる報道は全国を席卷した。災害情報は庄内地震の場合でも電報によって、2日後には、全国ニュースとなることができた。マスメディアによる情報の拡大は、江戸時代の比ではない。庄内地震の場合は、日清戦争開戦時という国家問題に押され、災害の情報量は著しく低下しているから、この事例をもってマスメディアによる災害報道の迅速性、伝播力などを論ずることはできないとしても、震災の被害統計、地震の原因に関する科学者の見解、写真あるいは、写真石版による災害の「実像」の流布は、これらのマスメディアを通じて、広範な人々の手元に届くものとなった。

人はこれらある種の本当らしさを持つ情報に接して、自らの見聞や判断を他者に伝えることの必要性を感じなくなったのではないだろうか。いわば、押し寄せる「正確」な情報に自らも身を委ね、そこに大いなる差異を見出さない限り、自ら労して他者への情報発信をする必要を感じなくなる。マスメディアの登場が圧力となって災害記録が書かれなくなる要因とは以上のような連鎖の結果ではないか。

では、人はなにも災害記録を残さなくなるのかといえば、そうではない。大飛の災害絵巻にみるような、自ら体験を語らねばならないと感じた人々にとっては、抜き差しならないものとしての記録は残されるのである。しかしながら、江戸時代の大量に残されている大半の災害記録は、かわら版でさえも筆写の対象となり、総じて内容も類型的なものに終始する。筆写の連鎖がもたらした結果である。

もちろん、このことは、当時の人々が類型的情報を好んだということではない。近代情報網の未成立の時代の情報収集、獲得には多くの創意工夫があつて可能になったことには違いない。そして、自らの災害体験を子孫に伝えようと努力した災害も記録も数多く残されている。

災害に限らないが、珍事情報を求める人々の欲求はいつの時代を通じても根強い。もちろん、その欲求は、近代に入って、マスメディアによる圧力によって消滅させられるわけではない。しかし、マスメディアの登場によって、もたらされる画一的情報は、自らが記すことの必要性を感じさせなくなる、あるいはマスメディアによって代替され得ると感じ、人々は記録を残さなくなるということはいえるだろう。したがって、災害記録が近代以降減少するというこの内実は、恐らく、人々に、自らが媒体となって、転写の労力を注がなくてもよいと感じさせた結果ではないだろうか。近代マスメディアは、その圧倒的な力で、人々にそうした影響を残したのである。しかし、また、長い眼でみれば、そのことは筆写の省力化というだけに終わらない、地域社会と対峙する自己を考える場の喪失に向う別の結果を生んだはずである。

### 注

- (1) 拙稿「災害絵図研究試論—18世紀後半から19世紀の日本における災害事例を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』81集，1999年，57～100頁（後に、拙稿『近世災害情報論』塙書房，2003年に所収）
- (2) 拙稿「近世災害情報論」『国立歴史民俗博物館研究報告』96集，2002年，219～246頁（後に、拙稿『近世災害情報論』塙書房，2003年に所収）
- (3) 拙著『磐梯山噴火—災異から災害の科学へ—』吉川弘文館，1998年
- (4) 村松郁栄・松田時彦・岡田篤正『濃尾地震と根尾谷断層帯』古今書院，2002年
- (5) 小沢健志「『撮影術』と上野彦馬」復刻版『舍密局必携』解説編，産業能率短期大学出版部，1976年
- (6) 山口オ一郎「下岡蓮杖の写真事歴」青木茂・酒井忠康編『日本近代思想大系 美術』岩波書店，1989年，264～284頁；同右書を底本とした藤倉忠明『写真伝来と下岡蓮杖』かなしん出版，1997年；斉藤多喜男『幕末明治 横浜写真館物語』吉川弘文館，2004年，108～144頁
- (7) 亀井至一「横山松三郎の履歴」青木茂・酒井忠康編『日本近代思想大系 美術』岩波書店，1989年，284～290頁
- (8) 前傾田中著 55頁，および「あとがき」270～271頁；日本の写真家2『田中研造と明治の写真家たち』岩波書店，1999年
- (9) 田中雅夫『写真130年史』ダヴィッド社，1970年初版，2000年21版，55頁
- (10) 小沢健志前掲書，展示図録『幕末・明治の東京—横山松三郎を中心に—』東京都写真美術館，1991年
- (11) 東京国立文化財研究所美術部編『明治美術基礎資料集』内国勲業博覧会・内国絵画共進会（第1回，2回）編，本書については、木下直之氏のご教示による。
- (12) 岡畏三郎「内国勲業博覧会 沿革」『明治美術基礎資料集』内国勲業博覧会・内国絵画共進会（第1回，2回）編，巻末解説1～5頁
- (13) 福島県立図書館には仙台早撮写真師遠藤陸郎が撮影した鶏卵紙写真25点が所蔵されている。
- (14) 逸早く噴火の現場写真を地元で撮影したとされる岩田善平については、千世まゆ子『百年前の報道カメラマン』講談社，1989年に詳しい。
- (15) 「脱影夜話」については金子隆一氏のご教示による。明治新聞文庫蔵「写真雑誌」1号には発行日付がない。しかし、明治13年5月20日発行の第2号の表紙裏には書き込みがあり、「写真新文」が明治9年に発行されたことが個人の手書きでメモされている。
- (16) 1890年（明治23年）年会報告
- (17) 「写真新報」12号，1～3頁

- (18) 拙著『磐梯山噴火—災異から災害の科学へ—』吉川弘文館，1998年，80～89頁
- (19) 磐梯山噴火に関する写真については，大迫正弘・佐藤公・細馬宏通「磐梯山噴火の幻灯写真」『国立科学博物館紀要』26号，2003年，1～9頁に同館が所蔵のものについてすべて写真掲載されている．その他，宮内庁に21枚の写真が所蔵されており，佐藤公・中村洋一・北原糸子・鎌田浩毅・大迫正弘「1888（明治21）年磐梯山噴火の写真のデータベース化について」2004年秋季火山学会発表要旨で，言及されている．福島県立図書館には仙台早撮写真師遠藤陸郎が撮影した写真のうちの1点「長坂村死調査ノ真景」は前掲『田本研造と明治の写真家たち』に収められている．また，なお，この原板ガラス版写真について，金子隆一氏による調査で，湿版写真であったことが明らかにされた．これらの成果については，現在，磐梯山噴火についての報告書が2006年3月に刊行される予定である．
- (20) 濃尾地震の写真については，著名なミルン・バートの『The Great Earthquake of Japan 1891』写真帳のほか，大垣市立図書館，岐阜県立図書館，岐阜地方気象台などの地元に限らず，国立科学博物館の他，宮内庁には圧倒的多数の300枚余の関連写真が残されている．これらについては，原板が誰によって作成されたのか，判定が困難なほど，同一の構図での写真が多く，現在，内閣府「災害教訓の継承に関する専門調査会」小委員会の濃尾地震分科会において，写真のデータベースを作成するための調査が進められている．
- (21) 金子隆一氏のご教示による．
- (22) この災害の時に出版された写真を含めたさまざまな印刷物については，木下直之・北原糸子編『幕末明治ニュース事始め一人は何を知りたがるのか』（展示図録）中日新聞社，2001年；拙著『災害ジャーナリズム むかし編』財団法人国立歴史民俗博物館振興会，2001年などで簡単な概略を解説した．
- (23) 本節の庄内地震の被害と救済については，拙稿「庄内地震（1894）の被害と救済」『歴史地震』17号，2002年の一部を再録した．
- (24) 小倉金之助『一数学者の回想』筑摩書房，1967年，12～13頁
- (25) 表2の基礎データは震災直後の調査に入った帝国大学理科大学教授小藤文次郎によって，すでに得られていたものである．小藤による矢流沢断層を東北と南西に延長した震源断層線の想定は現地踏査を踏まえ，また，こうしたデータをもとに推定された．震源断層の確定作業は現在も続けられているものの，庄内地震の震源断層は現在のところ伏在の可能性は指摘されているものの，地学的に確認されていない現状らしい（小松原琢「庄内堆積盆地東部における伏在断層の成長に伴う活褶曲の変形過程」地学雑誌107-3，1998年；太田陽子他，「庄内平野東縁，松山断層の認定と活動期，および関連する諸問題」月刊地球，号外28号，2000年；山形県「庄内平野東縁断層帯に関する調査他 成果報告書」2000年）．庄内平野は北部に鳥海山，東部に出羽丘陵，南部に月山火山に囲まれ，平野部は2000メートルにも達する海成，潟成の砂質，泥質の堆積層，海岸部に砂丘が発達する地帯である．
- (26) 渡辺九十九「明治震水災概況」1885年2月；山形県議会「山形県議会八〇年史」一 1961年）
- (27) 飽海郡郡役所「震災一途」（酒田市立光丘文庫蔵）
- (28) 『読売新聞』明治27年7月25日5面
- (29) 『読売新聞』明治27年7月26日6面
- (30) 関野克「明治二十七年酒田地震—関野貞の日記から」『明治村通信』昭和54年9月号，津村建四郎氏のご教示による．なお，関野貞は後に帝国大学工科大学教授として，東洋建築史・美術史の一大権威となる．1935年69才にて死去．翌年から関野貞博士記念事業会が中心となって，『日本建築と芸術』第1，2巻，『支那の建築と芸術』第3巻，『朝鮮の建築と芸術』第4巻が刊行されている．
- (31) 帝国大学から庄内地震の実況調査に参加したその他の学者は，工学博士田辺朔郎，工学博士真野文二であった（「山形県下地震調査ノ件」『震災予防調査会報告』3号，7頁）．
- (32) 庄内地震と表現する例，山形県下の地震と表現する例もあるが，ここでは，庄内地震に統一した．
- (33) 『震災予防調査会報告』8号参照第1，1896年3月，1～22頁
- (34) 庄内地震の写真を含む，この時期の一連（磐梯山，熊本，濃尾，明治東京，関東震災など）の災害写真のガラス乾板や鶏卵写真などが国立科学博物館に所有されることになった詳細な経緯について，聞き取

- りによって判明した点は，以下の通りである．1976年頃，東京大学地球物理学教室の古い木造校舎を改築，大型研究センター建設のため，取り壊しに際して，蔵されていた古い地震計，その付属品，写真類などもろもろの物について保存が困難なことから，一部鯨絵などを東京大学地震研究所へ移し，その他は国立科学博物館に引き取られたということであった（津村建四郎氏談，地震研究所図書室島村司書談）．
- (35) 金子隆一氏のご教示による．
- (36) 増野恵子「近代天皇のイメージ形成—視覚情報分析の可能性について—」『非文学資料研究』5号，2004年，14～15頁
- (37) 拙稿「庄内地震を描く絵巻『酒田大震災実況図』」『歴史地震』17号，2002年，227～228頁
- (38) 『本荘市史』第2巻，812頁
- (39) 拙稿「江戸大地震之図」『予防時報』211号，2002年，口絵解説
- (40) 鶴迺舎主人述『東西田川・飽海三郡 甲午大地震記』11頁，酒田市立光丘文庫蔵
- (41) 増野恵子「日本に於ける石版術受容の諸問題—蜷川式胤『観古図説 陶器之部』「付言」をめぐって—」青木茂監修・町田市立国際版画美術館編輯『近代日本版画の諸相』中央公論美術出版，1998年，165～211頁
- (42) 北原糸子・上田和枝・河田恵昭「地震研究所蔵の濃尾地震と明治三陸津波の『新聞切抜』帳について」東京大学地震研究所『広報』16号，1997年，12～18頁
- (43) 『官報』明治27年10月24日，第3398号
- (44) 『官報』明治27年10月25日，第3399号
- (45) 『官報』明治27年10月29日，第3402号
- (46) 『読売新聞』明治27年11月1日，3面
- (47) 『読売新聞』明治27年11月6日，5面
- (48) 『読売新聞』明治27年11月21日，3面
- (49) 『読売新聞』明治27年11月22日，3面
- (50) 原信田実・北原糸子「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『年報 人類文化のための非文学資料の体系化』1号，2004年，62～104頁
- (51) 富沢達三『錦絵の力』文生書院，2004年
- (52) 青木茂「解説（一）」，酒井忠康「解説（二）」青木茂・酒井忠康編『日本近代思想大系 美術』岩波書店，1989年，440～531頁

付記：本論作成のための調査には，酒田市立光丘文庫の職員の方々に多大の御協力をいただいた．また図版（図42-1，図42-2及び図67）に示された写真の該当地点の調査，地図上への落としには東北公益文科大学講師の土岐田正勝氏にご教示いただいた．厚く御礼申し上げるとともに，ここに記して感謝したい．



## Disaster and Photography — A Case Study of the 1894 Shonai Earthquake —

KITAHARA Itoko

This paper focuses on the shifts in the media for disaster information, from the Early Modern Era to the modern day in Japan, through the historio-graphical analysis of the 1894 Shonai Earthquake.

Photography was brought to the islands of Japan by foreign delegations at the end of the Early Modern Era. It is said to have spread quickly all over Japan by the first 20 years of the Meiji Era (by the mid-1880s). By the time of the 1894 Shonai Earthquake, the age of the photograph had arrived in Japan.

In the first stages, photography was limited to personal portraits or beautiful scenery. However, at the end of the 1880's, when many big disasters struck Japan, photography occupied a remarkable role in conveying the news. Never before had people witnessed such realistic images of disasters. This had the effect of depriving the traditional Japanese news media, that is, the broadsheet, woodblock prints, and so on, of their role. At the same time, newspapers began to be published here and there. They disseminated the news fast and wide, and people made the earnest effort to gain the news through newspapers. In due course, people did not feel it necessary to write down their experiences and this seems to be one of the reasons why so few personal accounts of events or disasters have been left behind for posterity.